

人と自然が共存できる里山回復を目指した活動

猛暑の中から秋を探す

二十四節気の「処暑」が過ぎ、暑さは弱まる気配がなく猛暑の連続や最高気温を更新する事態は「高温災害」の兆候が見られます。こうした異常気象は自然からの恵みや自然災害にも直結して脅威です。

9月に入り徐々に気温が下がり、朝夕に爽やかな風と虫の音が聞ける実りの秋が早まることを願いたい。

活動拠点では、ミソハギの花が最盛期を過ぎ、ススキの穂が出始め、ツリフネソウの開花が一つ見つかりました。



ススキの穂が出始め



ツリフネソウ開花



ヤマクリとコナラのドングリ

林内の環境変化

今年の梅雨期間中は晴れば記録的な高温、日本海側と太平洋側では雨量でも違いがありました。活動拠点では雨なしで高温が続き、湧水が干上り、回復の見込みはありません。この環境変化が生態系に及ぼす影響を注視していきたい。



干上がった湧水

ツリフネソウは強い日差しと雨なしで生息地が乾燥化、その結果、水不足で葉焼けや幹が枯れている。



ツリフネソウ群落地で葉焼け



湿地の乾燥化で亀甲割れ